

Administrative
Training Exchange in
University of Nebraska
at Omaha 2008
Report

平成 20 年度職員海外研修報告書

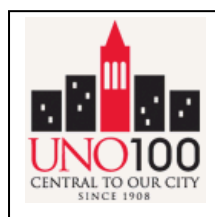
静岡大学

総務部 西山卓男（総務・企画チーム主査(企画担当)）

人文学部 今野美砂（学務係主任）

財務施設部 中尾文子（財務企画チーム決算担当）

2008. 12. 17 – 12. 22 / UNO



はじめに	1
1 国際交流	2
2 学生支援(課外活動)	3
3 学生支援(サビ スラ-ニング)	4
4 学生支援(施設)	5
5 地域連携	9
6 業務運営	10
7 財務	11
8 基金	12
9 その他の業務運営	13
10 卒業式・ILUNO 修了式	14
11 研修スケジュール	15
12 事前研修等	16
13 参考資料〔事前に用意した質問事項〕	17
14 最後に(まとめ)	18
15 所感	20



▲Memorial Campanile



■ UNO 国際学部の皆さんと

- ・グッティエ-学部長 (右から3人目)
(Dean) Thomas E.Gouttierre
- ・通訳をして下さったレイコ先生 (右端)
(Instructor and Coordinator)
Reiko Take Loukota
- ・コーディネートをして下さいました
ローリーさん (左から2人目)
〔ローリーさんは第1期の交換留学生〕
(Assistant Director) Lori Arias

平成 20 年度職員海外研修報告書

■研修期間：平成 20 年 12 月 17 日～平成 20 年 12 月 22 日

■研修先：ネブラスカ大学オマハ校（アメリカ合衆国）

■研修者：総務部総務・企画チーム	主査（企画担当）	西山卓男
人文学部学務係	主任	今野美砂
財務施設部財務企画チーム	スタッフ（決算担当）	中尾文子

■はじめに

大学におけるグローバル化については、新年度から事業展開される国の「留学生 30 万人計画」や次期中期目標・中期計画においても「国際化」のカテゴリーが別立ての扱いになる等、大学の国際化に向け、これまで以上に具体的で、高度な対応が求められている。加えて、教育の「質の保証」についても、国際水準の教育評価を意識した要請でもある。

既に、本学においても、秋季入学の導入や、ベトナムフエ市への海外窓口開設など、「国際化」に対応する動きが活発化しつつある。また、今夏の静岡空港開港で、特にアジアを意識した、国際化推進に向けた取り組み、またその効果にも期待される場所である。

一方、政府のいわゆる“骨太の方針”では、「地域再生」が重要なファクターになっており、大学の地域社会における役割が一層求められている。今年度から始まった戦略的大学間連携事業や、産官学連携における新たなコンソーシアム構想等は、まさに地域再生が目的とされている。

しかし、こうした新たな施策が求められながらも、運営費交付金は年々減額され、必要な予算確保もままならない、厳しい財政事情におかれている。

このような状況の中、幸運にも本研修の機会を得た。

研修の本来の趣旨は省かせていただくが、訪問先に、協定校であるネブラスカ大学オマハ校（アメリカ合衆国/UNO）を選んだ。これは、同校が独自の語学プログラムや中東アフガニスタン教育の専門コースを設ける等、様々なプログラムを展開して多くの外国人留学生を受け入れている実績があること、また、アメリカの大学の多くは多額の基金をもとに自律的な運営を行っており、言い換えれば、これは、地域社会と密接な連携関係にあることを示している訳で、前述の国際化及び地域連携の両面で新たな知見を得られるのではないかと考えたことに因る。

2009 年は本学の創立 60 周年であると同時に、UNO との交流協定締結 30 周年という記念すべき年にもあたる。3 名の研修者が担当する総務、財務、学務の各分野を縦軸に、国際化と地域連携を横軸にして、長年にわたり友好関係にある UNO での研修に臨んだ。

■ネブラスカ大学オマハ校と静岡大学の規模等について

【ネブラスカ大学オマハ校】

- 1 学生数 14,969 名 ※
[学部：12,127 大学院：2,842]
- 2 留学生 117 か国から 1,300 名受入
[語学研修等の非正規生を含む]
- 3 学部数 6
- 4 予算額 約 180 億円（うち 59 億(州)）
- 5 基金 約 127 億円中、87 億を系列の
3 大学へ譲渡(2006 年実績)

【静岡大学】

- 1 学生数 10,617 名
[学部：8,970 大学院：1,647]
- 2 留学生 29 か国から 268 名受入
[語学研修等の非正規生を含む]
- 3 学部数 6
- 4 予算額 162 億円 / 5 基金 —

※ネブラスカ大学全体(3校+ディメンター)が擁する
学生数 47,000 名、教職員 13,000 名。

■訪問部署：International Studies and Programs

■対応者：(Dean) Thomas E. Guttierre, (Director) Merry Ellen Turner, …

■目的：昨夏示された、国の「留学生 30 万人計画」により、優秀な留学生を戦略的に確保することが求められ、次期中期計画にも新たに「国際化」の項目が設けられた。留学生にとって魅力ある大学づくりのための方法や受け入れ体制を探る。

■内容：

▼専門スタッフの配置

①業務の特殊性を勘案して、専門的知識、実績のある職員を配置。ジェネラリストよりもスペシャリストを養成。(西山が 20 数年前に留学生担当だった当時から、Guttierre、Ellen Turner 両氏が国際部に在籍していることから)

②職員は、より良いポストを求めて昇格や他部署へのエントリーを行う。

③職員は、毎年評価(主にヒューマンリソース)を受ける。評価は、マネージャーレベル、サービスレベル(秘書的観点)、アドミストレーションレベル(上司による評価)の 3 種のフォームにより行われ、問題のある職員については、スタッフを交えて話し合い、向上を図る。

(→この評価制度について、Ellen Turner 氏は、一度きりの評価で、評価者に拠るところも大きく、公平性確保に疑問。むしろ自己評価の方が良いのではないかと、人事評価の難しさを指摘。)

▼広報

④人から人への情報伝達が一番の広報だと認識。“フェイスブック”というブログがあり、UNO に留学経験のある人たちの情報交換の場となっている。

⑤日本に対する留学生募集の PR は、GIO グループという留学あっせん団体約 20 社に依頼。

▼特徴ある取り組み

⑥アフガニスタンプログラム：約 35 年前に設けられたが、元々専門とする教員が配置されたことによるもの。当時、外国に目を向けたプログラムは無く、旧ソビエトが侵攻した際には世界的に注目された。アフガニスタン研究所へは国からも助成金を得て様々な活動を展開。

⑦語学研修プログラム(ILUNO 等)：本学からも毎年受講学生あり。UNO に在籍する外国人留学生は、語学研修生等を含め、約 1,300 人。(うち語学研修は約 250 名/国別内訳は、インド・中国・サウジアラビア・日本・韓国が各 10% でおおよそ半数を占める)

▼留学生支援

⑧学生寮は、構内外に大学運営のものと民間運営のものが並存。民間運営タイプの寮で月の住居費は約 45,000 円程度。在学中を通して寮に住む学生は少数で、2,3 年で民間のアパートへ。現在計画中のものを含め、3 年後には 2,500 室の確保を目指している。(→P7 学生寮)

⑨外国人留学生専用のものは無いが、約 50 家族がホームステイを受入れ。(約半年の居住)

⑩国際部の職員が、銀行口座開設や、当面必要な生活用品の買い物に同行する。担当職員 3 名は、専用の携帯電話により連絡を取り合い、24 時間体制でサポート。教員も協力的である。

⑪一般学生が 1 学期 100 ドルの手当てで、留学生の世話(学内案内等)をするシステムもある。

■業務改善へのヒント：

①自らの適性にあった業務に従事し、実績を積み重ねることで、責任をもち、やりがいのある職場に。長期在職を可能にするためには、異なる視点による人事評価、改善システムは必須。

②学生による外国人留学生へのサポート体制は、相互にとって有益である。

③留学生にとって、特色ある教育プログラムが設けられていること。後述のサービスラーニングでも多文化交流・学習としても有効に思う。

■訪問部署：Student Organization and Leadership Programs

■対応者：(Director)Erin Cron

■目的：学生主体の大学運営の原点に立ち、学生に愛される大学作りのために、新たな取り組みや工夫できることはないか、窓口業務の現場から探る。

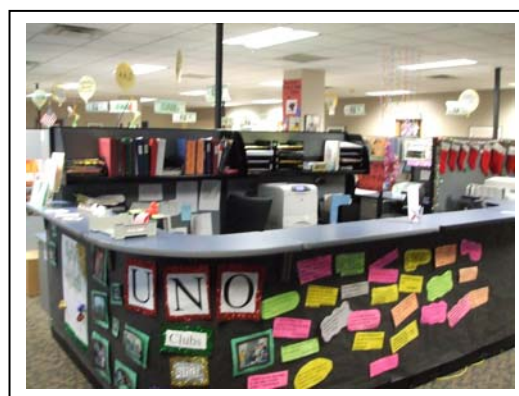
■内容：

▼課外活動における支援

- ①文化系のサークル、学生団体へのサポートセンターを視察。ロッカーや机、ミーティングルームのほか、印刷機やポスター等の作成機材を備える。学生会館1階にあり、スタッフが常駐、オープンスペース形式で学生が立ち寄りやすい。
- ②全ての教職員が、「学生」を第一に考えている。人材育成が大学の最も重要な使命と認識。「学生支援」は、大学ランキングにも重要な要素として挙げられている。
- ③経費は以前より確保されるようになった。教員の研究費はもっぱら外部資金に依存。
- ④“Student Government”が組織されており、リサイクルプログラム等を自発的に展開。
- ⑤“Student Government”は、学長への要望に際して、事前に十分なリサーチを行う。最近、実現したものは、新聞の無料配布（学生会館に専用ボックス）、禁煙化、美術品の学内展示、学生ラウンジの整備等。
- ⑥“Leadership Development”（リーダーシップ開発プログラム）というプログラムがあり、毎年25～30名がリーダーとしての資質を身に付けるための勉強会を継続的に（卒業時まで）行う（本学で行う体育会サークルのリーダー研修とは性格が異なる）。学外者も講師に招き、修了者には卒業時に特別なメダルが授与される。
- ⑦カルチャープログラムとして、アジア、ラテン、黒人などの異なる民族の学生が集い、文化を学んだり、イベントを開催している。
- ⑧日本でいう“大学祭”のような催しは無い。Embassy Organizationのようなイベントで、クッキー等を販売、活動資金の一部に充てる。



▲課外活動支援について研修中。（左から、中尾、今野、西山/右はUNOスタッフ）



▲カウンター奥は、パーティションで仕切られたサークルのブースが並ぶ。

■業務改善へのヒント：

- ①学生主体の大学運営。
- ②地域社会におけるリーダー養成として、学業の専門分野だけでなく、継続的なリーダー養成プログラムを設けてはどうか。
- ③外国人留学生を交えた、異文化を学ぶ国際交流プログラムの提供。

■訪問部署：Service Learning

■対応者：(Director)Paul Sather

- 目的：本学の次期中期目標・計画における「教育」の観点は、「教えの場から学びの協働体へ」。学びのあり方が変わる一方、企業からは、専門分野での知識に加え、マネジメント能力や即戦力につながる技術等の習得、地域への貢献が求められている。新たにどのような教育プログラムが展開されているのか、特徴ある取組みの内容を確認する。

■内 容：

▼教育支援〔“サービラーニング”プログラム〕

- ①目的：講義による専門的知識だけでなく、地域社会との関わりを通じて、地域に求められる人材、基本的な力を養う。(スキルビルディング)
- ②導入の背景等：1980年代、大学生が選挙に行かない(関心をもたない)状況が続き、多くの大学の学長がこの状況を憂慮、地域コミュニティとの強い関係を築く必要性を認識し、そのための方策を考えたことがきっかけ。現在、国内で1,500もの大学や関係団体がプログラムを実施。インターンシップ(就業体験)とは目的が異なる。(アイルランドやドイツ等でも実施とのこと)
- なお、近年の調査で、地域貢献について、1年生の82パーセントの学生が自らの使命として認識しており、このプログラムが、卒業後、市民としてどのように地域に貢献できるか、考えるきっかけにもなる。あくまでも学生のための“サービス”として位置づけている。
- ③内容：毎年、“サービラーニング”として、約110のプログラムを開設、セメスターで必ず履修する。“サービラーニング”は、カリキュラムの一部として扱い、専門知識の習得に加え、学外での実践的な作業に携わるものである。プログラムの例としては、企業での実習や、社会福祉施設でのソーシャルサービスのほか、ある団体から補助金を得るための申請業務や、ビジネスマーケットプランを立てたりする等、多岐に及ぶ。プログラムは、個人単位ではなくチームを組んで業務に当たる。なお、外国人留学生も、アメリカ社会を知る意味で履修させている。(ギリシャの学生が高齢者福祉施設へ実習に行ったが、自国では親の面倒は子供が看るのが常識であり、理解に苦しんだとのエピソードも。)
- ④実施体制：受け入れてくれる企業や団体の開拓も、このセクションの重要な業務である。インターンシップと認識されてしまうケースや、受け入れに消極的な企業もある。円滑な実施のためには、派遣先(企業・団体)で、双方に問題が発生していないか、常にチェックすることが必須である。年6回のフォーカスグループセッションで、教員を交えて改善策を検討。経費は、連邦政府から支援がある。オバマ新大統領が、このプログラムを年間100時間履修した場合、授業料を4500ドルに免除する(通常約6000ドル)、といった施策を検討しているとのことである。
- ⑤課題：学生が企業等へ赴く必要があり、時間の確保が困難。／学生から従事したい業務を要望されても、教員サイドに強要できないこと等。

■業務改善へのヒント：

- ①講義形式のキャリアデザイン教育をさらに充実させるため、“サービラーニング”を導入してはどうか。特徴的な教育プログラムであり、新たな「学びの場」を提供するとともに、地域とのつながりも強固になると思われた。



■訪問部署：Student Center, University Village…

■対応者：(Supervisor)Chris Buethe

■目的：福利厚生施設の充実度は、今や受験生の大学選択にも重要な条件となっており、利便性をも兼ね備えた施設整備が求められている。学生食堂やホール、学生寮等の視察やその管理・運営方法を伺う中で、本学の学生会館や南会館(浜松)等、利活用のヒントを探る。

■内容：

▼Student Center (学生会館)

①概要：キャンパスのほぼ中央に位置する。

1階は、書籍・文具の売店やラウンジ、学生団体用のオフィス、保健センターなど。

2階は、2つのレストラン、大小のレセプションホール、チャペルなど。

館内はメンテナンスと掃除が行き届いており、床や壁材の汚れやゴミは見当たらない。

開館時間は、平日 7:00-22:30,土 7:00-17:00,日 12:00-21:00

▲学生会館外観



②1階：

学期末、クリスマス休暇前ということで、明日の卒業式用の角帽を取りに来る学生以外、昼時にかかわらず学生の姿はあまり多く見られなかった。

学生のための保健センターがあるが、メンタル面での相談室は学生があまり出入りしない管理棟に設置。(P13 参照)



▲学生会館1階 ピロティ



▲ラウンジ



▲売店・書籍



▲保健センター



▲外に緊急事態通報装置

③2階 I :

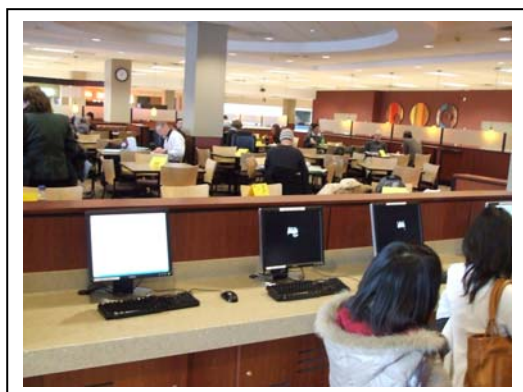
食堂はカフェテリアとbuffet形式。大学が経営し、ランチbuffetは約 700 円。責任者の話では、赤字経営ではない。質に見合った価格設定に努めている(質を下げる位なら料金を上げるとも)。長期休業中も、語学プログラムの学生等がいるため、通常営業。また、多くの学生(常時約 60～70 名)が、配膳や調理補助等に従事。留学生のバイトとしても人気があり、時給は 6 ドル。



▲カフェテリアスタッフ(左端)に聞く



▲カフェテリア (ピザ・パスタコーナー)



▲カフェテリア
(自由にパソコンが使えるコーナーもある)



▲カフェテリア(充実したドリンクコーナー)

○現在、UNO に留学中の 3 人の静大生と、buffetでのランチを共にしながら懇談。

石塚さんの UNO の第一印象は、施設のバリアフリー化が進んでいること。皆さん、就学、生活上の大きな不満や問題は無いとのこと。教員も親切で、きめ細かなサポートをしてくれるほか、学生ボランティアが登録され、留学生を病院へ送迎したり、生活上のサポートをしてくれること、また、図書館が深夜 0 時まで開館していること等を評価。



▲buffet (静大生の皆さんと)
左側手前から、杉田さん(人文)、石塚さん(教育)、類家さん(情報)

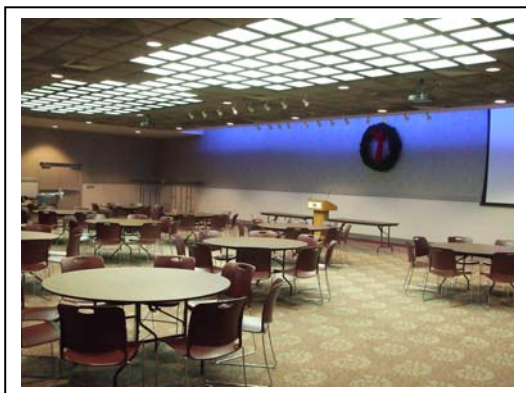


▲コーラスサークルの学生が歌で歓迎

④ 2階Ⅱ：

レセプションホールは、学生行事や地元高校の卒業パーティ等の行事に積極的に貸し出し。特に高校へは、“将来の UNO への入学を期待して提供”と明言。

結婚式も可能で、併設のチャペルは、整備費用を出資してくれた方の名を冠している。



▲レセプションホール



▲チャペル（出資者の名が付く）

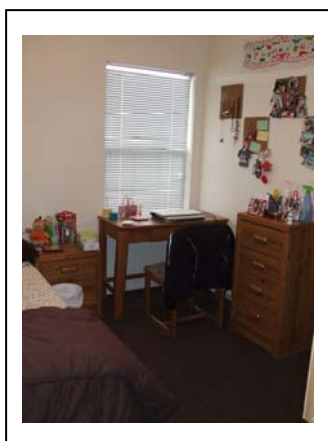


▲電子掲示板（黒い箱は無料配布の地元新聞）

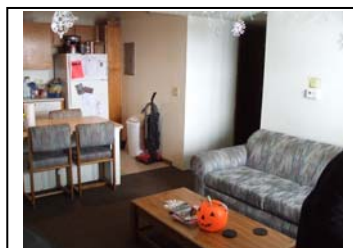
▼ Student Dormitory（学生寮／Drive South）

一部大学運営の寮もあるが、赤字経営のため多くは民間会社に運営を委託。4人分の個室に共同のキッチン、リビング、バス・トイレは2人で1つ（計2つ）が付き、1ユニット。賃料は、光熱費込みで45,000円。

民間のアパートはクレジットカードによる決済が必要で契約時に多額の前金も要求されるため、学寮の需要は多い。この寮は576人が入居可能。他に個室（キャピタルコート）の寮もある。現在は計1,600人が入居可能。3年後に2,500室の確保を目指す。



（写真は、寮まで同行してくれた教育学部石塚さんの居室）



▲共用のリビング（4人居室）

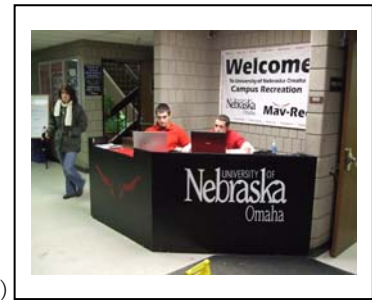


▲ランドリールーム

▼Sports Gim (体育館)

アルバイト学生が、受付業務、プール監視を担当。(時給 6ドル)
 地域のスポーツ団体や、プロのスポーツクラブ等の練習場として貸し出し、利用料収入を得ている。
 外部の利用を見込んでいるため、メンテナンスが欠かせない。
 他に1棟、プロのスポーツ選手も利用可能な体育館あり。

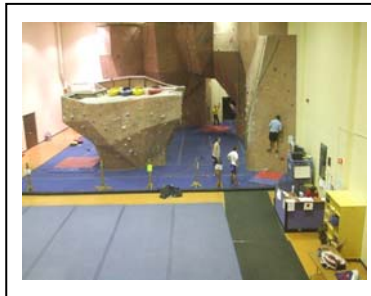
受付 (学生が担当)



▼室内プール



▼クライミング



▼コート



▼Library (図書館)

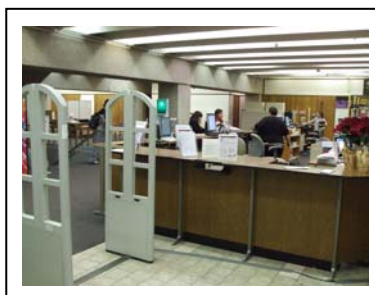
蔵書検索は、70台のコンピュータ端末で早期検索が可能。
 開館時間は、平日、朝7時から夜12時までと長く、静大からの留学生も高く評価。

秋/春 月～木… 7:00-24:00 / 金… 7:00-17:00
 土… 9:00-17:00 / 日… 12:00-24:00
 夏 月～木… 7:00-21:00 / 金… 7:00-17:00
 土… 12:00-17:00 / 日… 12:00-21:00 (冬季省略)

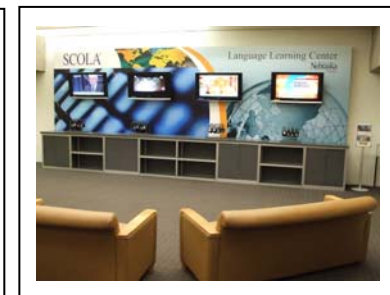
(改修工事のため、メインの閲覧室は視察できなかった)



▲開架コーナー



▲入口・貸出カウンター



▲視聴覚コーナー

■業務改善へのヒント：

- ①地域への便宜供与、レセプションホールや体育館の貸し出しを積極的に行っていることや、貸すためのメンテナンスが行き届いていることが注目された。
 本学も地元スポーツクラブ・団体の練習及び試合会場として、サッカー場、野球場等を、私立大学等の試験会場として講義室を貸しているが、借料の確保や将来の入学生を確保するためにも、さらに大学施設の開放、そして市民の方に、キャンパスへ足を運んでいただく方法を積極的に考える必要があると思われた。
- ②学生の大学運営への積極的な“活用”を図ってはどうか。既に図書館や生協等で雇用しているが、その他業務への従事、施策企画段階での参画が、大学の活性化にもつながるのではないかと。

■訪問部署：College of Public Affairs and Community Service

■対応者：(Dean)B.J.Reed(学部長兼務)

■目的：「地域再生」が国の成長力の包括的戦略とされる中で（経済財政改革の基本方針 2008）、地域における大学の役割が一層重要な意味をもつ。地域コミュニティと一体となった、地域に愛される大学であるためにはどのような取組みがあるのか、実情を探る。

■内容：

▼基本方針

- ①1997年にビジョン、ミッションを立案し、3つの目的を設定した。“都市型大学としての機能” “学生中心の大学”、“教育の質の保証”。その全てに「地域社会との連携」のキーワードが関係する。翌年、この目的を達成するため、学部やセクション毎に、実行計画を策定した。
- ②この計画立案には、地元企業やNPO法人の代表者らともミーティングを行い、反映させた。（サポートしてもらう、という意識がある）
- ③また、計画が達成されているか、こうした学外者による評価が行われ、計画の妥当性や変更が必要か検証される。
- ④2,3年前に、学生支援にかかる新たな目標を立案、今後、学生による満足度調査と合わせて、評価を行うことになる。今年度は、地域連携の実績をチェックしている。
- ⑤目標・計画は一度立てたら終わり、ではなく、例えば学生支援であれば、最近の学生気質や生活環境、入学する学生の年齢層（UNOは社会人入学も多い）、経済状況等が変わっていないか、チェックが必要である。これを常に地域に公表することが重要。
- ⑥地域の経済界の有力者、企業の協力なくしては、大学運営は在り得ない。ネブラスカ大学全校のファンドを扱うセクションがあり、積極的に“営業活動”を行っている。（8基金）



■業務改善へのヒント：

- ①UNO構内を巡ると、度々建物の入口にある寄附者、寄贈者の銘板に目が留まる。名前を冠した奨学金や建造物が得られるのは、地元で優秀な人材を輩出していることに加え、大学の将来計画立案や評価に、地域社会がその一員として参画しているからである。学内外への情報提供も欠かせない。

本学の場合をみると、教育や研究面での地域連携は、実績があり、社会の評価も高いが、管理運営面での地域連携は防災関係以外、あまり無いように思う。唯一、「経営協議会」に学外有識者が参画しているが、施策案を共に練り上げていくという印象はまだ薄い。随時、大学運営にかかる情報提供を行い、タイムリーな提言をいただくこと、また、地域コミュニティとの接点として、テーマを定めたディスカッションの機会を設けてはどうかと思う。



(上) 寄付者の名を冠したコンピュータセンター。／(下) 玄関に掲げられた出資企業名のパネル。(工学部)

- 訪問部署：College of Public Affairs and Community Service
- 対応者：(Dean)B.J.Reed(学部長兼務) [「5 地域連携」と同じ B.J.Reed 氏に伺った]
- 目的：次期中期目標・計画では、大学の機能的役割について方向性を定め、個性化を重視、合わせて教育の質の保証や国際化等が求められている。大学の将来計画の立案にあたり、そのポリシーや策定の手順等について伺い、効率的かつ効果的なプランニング作業の参考とする。

- 内容：

- ▼基本方針

- ①1997年に作成したビジョン、ミッションは、“都市型大学としての機能”、“学生中心の大学”、“教育の質の保証”の3つを基本理念としている。(不変のもの)
それぞれが関連性をもっており、例えば“都市型大学としての機能”で言えば、州で最も経済的に発展しているオマハ市で、経済の勉強や就業体験、マネジメント能力を習得して欲しいと願っている。
- ②長期プラン等は、学長補佐（B.J.Reed氏は学部長と兼務）の3名により原案を策定。
- ③原案は、コミッティ(Committee:委員会)の代表者40から50名から成るサミットより審議が行われ、その後、地域の方や学生等150から200名が集うフォーラムで議論される。
サミットは、地元企業、関係団体等の代表者等もメンバーとなる。
見直し作業は、原案づくりを行った3名が行う。最終的には学長判断に委ねる。
- ④ミッションやビジョンは変わらないが、3年に1度のチェック(評価)で、必要があれば実施方法を見直す。
- ⑤コミッティは、15から20名の教職員で構成され、数々の提言をサミットへ提言、サミットは基本計画の変更点を報告し、行動計画を練り直す。その成果は翌年のサミットで報告される。

- 業務改善へのヒント：

- ①前項、地域連携と重複するが、長期計画立案の段階で、地域コミュニティから意見を聞く場が設けられており、地域が大学に何を期待し、望んでいるか、が反映されやすい。
こうしたことが地域との協働、支援への理解の深まりにつながるのではないかと感じた。
- ②学内からの意見聴取も、部局ではなく、各分野の委員会から、としていることは、専門的見地での議論が行われ、計画方針との一体的な施策実行につながることは、一つの有効な手段ではないかと感じた。



■訪問部署：Finance

■対応者：(Associate Vice Chancellor)Julie Totten,(Director)Joseph L.Huebner

■目的：厳しい財政事情はアメリカも変わらず、UCLAでも08年秋に1万人規模の学生減を表明。
外部資金確保に向けた取組み、地域からの資金援助を得るための方策等について伺う。

■内容：

▼財務状況等

- ①予算額は180百万\$〔180億円／内訳は、60：州、50：学費、40：収益事業(本、寮費等)、30：連邦政府からの奨励金・個人寄附等〕
- ②UCLA(学生定員減)とは方針が異なり、反対に、学生数を増やして授業料収入を確保したい。
- ③フィナンシャルステートメント(財務諸表／州政府へ提出)はHP上で公開している。
- ④将来計画と予算の関係(財政担保)については、よほど大きな改革でない限り、財務サイドでは意識しない。学部レベルの組織整備は、既存施設・設備の利用を優先して考える。
- ⑤UNOは予算執行額の82%を人件費が占める。(静岡大は78%)
- ⑥キャンパスサインや建物群に統一感があるのは、デザインのガイドラインが定められているため。歩道等に使うブロックの色まで指定。15年位先までの構内整備計画ができています。
- ⑦州からの経費と寄付金は別会計。大まかな用途は州政府からの経費と学納金は人件費、教育費に。連邦政府からの交付金及び寄付金は、その不足分充当とその他新規事業等に使う。
- ⑧施設整備には州政府からの予算14億円を充当。これに個人からの寄附約4億円がある。現在ビジネス関係の校舎の建て直しを計画。州からの予算と不足分は個人の寄附に依存。
- ⑨10数年前は、UNOの財政状況が良くなかったが、基金や寄附、合理化等により改善。

▼事務体制

- ⑩会計事務は本部のほか、各学部にも配置。どの学部にもビジネスマネージャーと呼ばれる財務の専門的知識を有した職員1名を配置している。
- ⑪外部資金獲得を専門とするセクションがある。会計事務部門から独立しており、企業スポンサーのリサーチ、交渉を受け持つ。
- ⑫グループ全体の予算を取り仕切る“ボード”と呼ばれる7～9人で構成する組織がある。いずれも選挙で選ばれた「学外者」。職員の給与水準を含め、予算のガイドラインを定める。当然決算のチェックも行う。
- ⑬学内にコストセンターがあり、経費の使途がわかる仕組みになっている。



■業務改善へのヒント：

- ①州からの予算、学納金は主に人件費と基幹的な運営資金に充てられており、更なる施策の充実のために、積極的に研究費、補助金、寄付金の獲得のための努力をしている。外部資金獲得のための専門部門があるのは有益と感じた。
- ②売店、食堂や学生寮など、価格設定をサービスに見合ったものにしており、収益事業による収入が本学に比べて高い。その収入を学生サービスの充実に活用するためにも、価格設定の見直しができるのではないかと。
- ③築年数が古い施設が多かったが、メンテナンスが行き届いているため、古さを感じさせない。また、長期的なマネジメントにより統一感のある建物群にしているため、キャンパス全体が心地よく感じられた。ユニバーサルデザイン、トータル的なデザインプランが必要に思われた。

■訪問部署：University of Nebraska Foundation

■対応者：(Director) Mary Macchietto Bernier

■目的：創立何周年のいわゆる“記念基金”ではなく、経常的に基金を集める仕組みや運営体制について確認する。

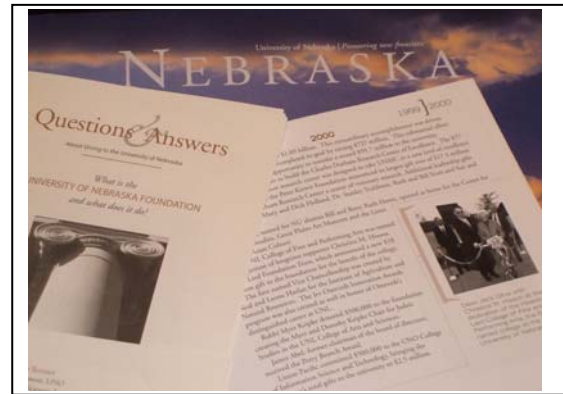
■内容：

▼業務内容等

- ①リンカーン校やメディカルセンターなど、大学のグループ全体4機関の基金を管理・運用する組織が、大学とは独立しておかれている。(本部はオマハ市内)
- ②専門知識をもった職員(1機関(大学等)につき、10~20名程度)を配して担当。基金への協力は、直接企業を訪問して、交渉する。企業ごとに大学が貢献できる内容等を調べ、企業側に資金拠出のメリットを説明する。
- ③個人の協力者は、“学生を育てている”という意識、建物や奨学金に自分の名前が付されることに満足している。税制上の優遇措置もある。
- ④新聞広告(州内)による募集も行う。



▲UNO 基金事務局 (キャンパスとは別の場所に構える)



▲基金に関する数々のパンフレット。年次ごとの寄付者氏名と金額、使途を掲載。Q&Aも。

■業務改善へのヒント：

- ①基金は、創立何周年といった際に行う特別な募金事業でなく、常に募集・運用されているもの。大まかな運営資金の分けをみると、大学運営にかかる基本施策は交付金や授業料で、新規事業や改善・充実への取組みは基金で対応、と仕分けられている印象である。
- ②本学の国際交流基金は、低金利が続く中、既に原資を取り崩しており、多額の経費を伴うダイナミックな施策が展開できない。はたして、出資者がこのような運用を望んでいたのか、今一度基金の在り方に立ち返って考え、有効なプランに充当し、“活用”してはどうか。
- ③また、企業からの資金協力を期待する場合、メリットが見えないと賛同が得られないことから、ニーズ発掘や学内シーズの積極的なPRも有効である。さらに、将来構想等の審議に地元有識者や企業経営者からも広く意見を聞くことも必要ではないか。
- ④さらに、寄附者の名を冠した奨学金の創設や、施設等、個人による寄附を期待できるような施策を打ち出してはどうか。
- ⑤本学がこれまで設けてきた基金をどのように活用し、どのような事業を行ったかについて、広く公表する必要がある。これにより寄附者に対する感謝の意を示すことにもなり、また新たな寄附者を呼ぶ役割を果たしていると感じた。

■情報戦略・情報システム：

○本学における個人情報の漏洩問題や、学内の業務システムや大学情報の一元化等の課題があることを説明。

①学生には情報システム上の個人番号が付され、様々な情報が管理されている。

②オープンコンピュータが約1,000台設定され、主に授業、実習に利用されている。但し、情報コンセントは備えられていない。

③教務システムにおいては、スチューデントインフォメーションシステムを設置。現在2カ年計画を打ち立てており、州全体に拡大、統括していく予定である。

④情報を職域から出さない、ことを徹底している。“ブラックボード”にアクセスすることで、自宅に居ながらより学生の成績も見ることが可能。

⑤会計システムはUNO独自のプログラムによるもの。昨年業務サーバの統合を行った。



■メンタルヘルス相談室：

⑥学生センター内にある保健センターとは場所が異なる。学生の出入りの少ない管理棟内にある。

⑦専門のカウンセラーは常時5名（静大は両キャンパス各1名）。非常に忙しい。



■学内巡回バス／駐車場／パトロール：

⑧スクールバスは朝7時から夜7時まで、約10分おきに構内を巡回（無料）。

⑨駐車料金は、月13ドル、年払いだと100ドル。学生数に比して駐車可能台数が少なく、近隣の2つの教会の駐車場も借用。

⑩キャンパスセキュリティは24時間体制。守衛が構内を巡回し、駐車違反を摘発。構内で発生した事件・事故への対応・処理も行う。

(右写真)スクールバス（10分おきに構内を回る）



■その他学生サービス等：

⑪休講情報は、大学HPトップに掲載。教室変更もサイト上で確認可能。

⑫履修登録は自宅からネットで行うことができる。

⑬教員は授業への出欠により評価を重視。履修登録に際しても、追加登録は厳格に認めていない。単位付与は、かなりナーバスに扱われている。

⑭職員や社会人学生のための託児所も構内に完備。

(右写真) 語学やリーダー養成プログラム、女性・障害者支援等、様々なパンフレットが用意されている



研修期間中の12月19日に、市内でUNO卒業式(年3回)が行われた。

当日は、ILUNO(語学プログラム)修了式に出席の後、学長主催の祝賀会(昼食)に招かれ、学部長等と会食。午後、卒業式会場へ向かった。

■ ILUNO 修了式 :

- ①学生会館内レセプションホールで行われた。
進行役はILUNOプログラム受講の留学生。
本学人文学部の杉田真依子さんも今日が修了式。



■ 祝賀昼食会 Graduation Luncheon :

- ②学長主催。部局長等の役職員のほか、卒業生代表者(女子生徒1名)とその両親、婚約者も招待。
学長から、卒業式を迎えられたことへの感謝のメッセージがあった。
- ③同席のグッティア国際学部学部長から、「友好協定校の静岡大学からのお客様」として紹介され、静岡大学との交流協定30周年の記念すべき年を迎えることや、これまで多くの学生が交換留学生として相互留学を果たしたこと等の成果が報告された。



▲役員らと席を並べる



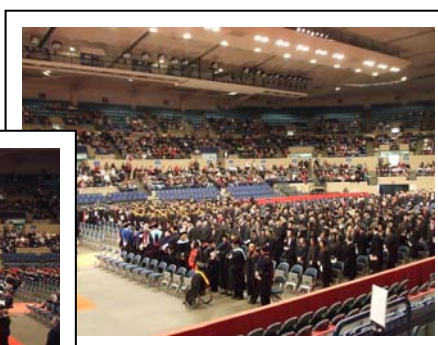
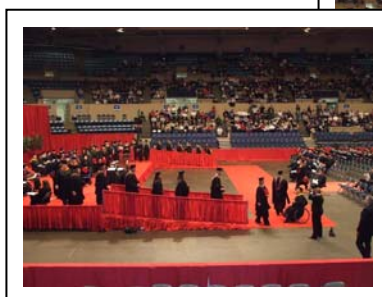
▲グッティア国際学部長と



▲John Chistensen 総長と

■ 卒業式 Commencement Ceremony :

- ④市内シビックアトリウム(市民公会堂)が会場。今回の卒業・修了生は約900名。
会場のアリーナ席に大学役職員と卒業生、客席には保護者、在学生等が着席。
- ⑤式の進行は、卒業生・修了生入場→大学関係者入場→国歌斉唱(男子在学生独唱)→学長式辞→来賓祝辞→卒業生代表謝辞→卒業・修了証書授与(ドクター、マスター、学部の順に1名ずつ/学長と握手、個別に写真撮影)
- ⑥壇上では手話による通訳、OBによる演奏も行われた。



11 研修スケジュール

Schedule for Training Exchange

■ 2008.12.17-12.22

2008(平成20)年

Ⓜ:担当部署でのミーティング

日	時間	訪問部署・視察場所等	備考(本報告書頁)
12/17 Wed	15:15	成田空港発 ミネアポリス空港乗換え	
	16:05	オマハ空港着	ローリーさんら空港迎え
12/18 Thu	09:30-11:00	Ⓜ国際交流	p2
	11:00-11:30	Ⓜ課外活動	p3
	11:30-12:30	留学中の静大生らとランチ	p6
	12:30-14:00	学生センター、学生寮等の視察	p5-8
	14:00-14:45	Ⓜサービスラーニング(教務関係)	p4
	15:00-16:00	Ⓜ地域連携、業務運営	p9,10
	17:30-19:30	グッティアー氏らと夕食(オールドマーケット)	
12/19 Fri	09:00-10:00	Ⓜ財務	p11
	10:00-10:30	Ⓜ情報システム	p13
	10:30-10:45	Ⓜメンタルヘルス相談室の視察	p13
	10:55-11:15	サウスキャンパス(工学部)視察	
	11:25-12:00	ILUNO 修了式に出席	p14
	12:00-13:00	学長主催:祝賀昼食会に出席	p14
	14:00-15:30	卒業式に出席(オマハ市民公会堂)	p14
	15:30-16:30	Ⓜ基金	p12
	18:00-19:15	フルブライト奨学生らと夕食(グッティアー氏宅)	
	19:30-22:30	ミュージカル“クリスマスキャロル”鑑賞(市内ホール)	
12/20 Sat	10:30-17:00	(市内歴史博物館見学など)	
	19:00-21:00	ローリー、レイコさん達と夕食	
12/21 Sun	07:30	オマハ空港発 ミネアポリス空港乗換え	レイコさん空港送り
12/22 Mon	16:40	成田空港着	



▲グッティアー国際学部長宅にて
(中東諸国からのフルブライト奨学金
留学生の方々と)



▲City ホールでミュージカル鑑賞
(グッティアー氏、フルブライト留学生の皆さん
と。赤いマフラーの方は主役の役者)



▲THE DURHAM MUSEUM
(市内歴史博物館)



(下段左)イタリアンレストランにて
(左はディレクターのエレン・ターナー氏、右は、レイコ先生)
(下段右)ステーキレストランにて

■2008.08－2009.01

月日	事項	内容等	備考
08/下旬	海外研修決定	—	
09/19	第1回オリエンテーション	・研修の目的を共通認識した後、藤井課長、小林さんの海外研修体験談を聞く。	国際交流チーム
09/26	第2回オリエンテーション	・研修内容についてディスカッション。研修事項案が次回までの宿題に。 ・英語に慣れるため、次回セッションから、近況を英語で報告することにした。	国際交流チーム
09/29	研修者打合せ	・研修事項案の検討	メール
10/03	第3回オリエンテーション	・研修内容を「学びの提供」「学生生活へのサポート」「大学運営」の3分野から選定。 ・具体的な質問内容、希望研修先が宿題に。	国際交流チーム
10/06	研修者打合せ	・質問事項案の検討	メール
10/09	第4回オリエンテーション	・質問事項を確認。英語訳が宿題に。 ・昨年度の研修報告で、時間が十分とれないこと等を勘案して、研修先は1大学に。 ・研修先を英語圏の大学を優先して選定することを確認。[アルバータ大学(昨年研修先)への再訪も。]	国際交流チーム
10/14-	研修担当チーム協議	・研修の在り方、研修先等について、人事・労務チーム、国際交流チーム等で調整。	人事労務チーム 国際交流チーム
10/15	研修者打合せ	・質問事項の英訳案の検討、国際交流チームへ提出。	メール
10/24	第5回オリエンテーション	・研修先をネブラスカ大学オマハ校に決定。 ・研修日程案(2案)を決定	国際交流チーム
11/05	UNOへ正式に受入れ依頼(露無センター長からも)	・研修者、日程案等。	メール(国際チ)
11/05	UNOから受け入れ承諾	・訪問部署を特定するための質問等の確認も。	メール(国際チ)
11/07	UNOへ研修内容等連絡	・研修日数を2日間とすること及び質問内容。	メール(国際チ)
11/10	UNOから研修内容承諾	・宿泊先確保等の連絡。	メール(国際チ)
11/13	第6回オリエンテーション	・旅行会社(霞が関トラベル)との打合せ等	国際交流チーム
	久保先生(人文)とミーティング	・夏季短期留学引率の経験談から	市内
11/15	研修者打合せ	・質問内容及び本学の状況を確認。	メール
12/05	UNOからスケジュール連絡	・対応者、訪問先等の詳細なスケジュール。	メール(国際チ)
	研修者打合せ	・質問内容等の確認	グリル
12/11	第7回オリエンテーション	・旅行会社(霞が関トラベル)との打合せ等	国際交流チーム
12/16	研修者打合せ・局長等へ挨拶	・日程及びお土産等の最終確認等。	総務部
01/14	研修者打合せ	・報告書内容、Lori 等へのお礼について	グリル
01/22	研修者打合せ	・報告書内容、発表手順等の確認	グリル
01/27	事務協議会報告	・研修報告	共通 A 棟

※上記のほか、研修内容等にかかる諸連絡・確認事項等については、随時メールにて行った。

13 参考資料

Reference Materials

■ 渡航前に UNO に送付した質問事項。研修者自ら英訳にも挑戦、国際交流チームの協力を得て完成。結局、研修時はこれに依ることなくミーティングが行われた。(本学の状況も併記したが本資料では省略)

テーマ	質問内容
■ 学生へのサポート Support for students	目的 学生主体の大学運営の原点に立ち、学生に愛される大学作りのために、新たな取組や工夫ができることはないか、施設整備の面から伺う。また、大学の国際化推進が求められる〔中教審：教育振興基本計画（H20.7）〕なかで、外国人留学生の受入れ体制や支援のあり方について、改善や充実が必要な点を探る。
	施設整備 Q1 学生のためのリフレッシュスペースはありますか？(屋内・屋外) Are there any lounges or open spaces free to use for students in their free time?
	Q2 学生のための施設で、管理・運営や、使い方に何か特徴のある取組みはありますか？ Do you have any particular use and management of the university facilities?
	Q3 学生からのリクエストはありますか？どのような方法で知ることができますか？ How do you hear students' opinions and requests regarding facilities?
	Q4 食堂は学生に人気がありますか？その理由は？ Are your cafeterias popular among students? Why?
	Q5 長い休みの間、食堂や売店は利益が少なくなりますが、経営的に成り立つ工夫がありますか？ Do your cafeterias or shops open during long vacation? In the long vacation, how do you manage the cafeterias and shops to keep profitable?
	Q6 リフレッシュスペース、食堂等を視察させていただきませんか？食堂でランチをとらせてください。 Could you show us your lounges and cafeteria etc, please? And could we have a lunch in cafeteria?
	外国人留学生受入体制 Q7 留学生のための相談窓口や、専用のオープンスペースはありますか？ Do you offer advising/counseling services especially for international students? Are there any open spaces for international students free to use?
	Q8 海外に向けて、どのような方法で大学を宣伝していますか？海外での広報活動は？ How are you advertising/introducing your university toward overseas? As well as do you offer publicity activities outside of US?
	Q9 留学生にとって魅力的な制度はありますか？奨学金、宿舍の優先利用、アフターケア等。 Are there any attractive services especially for international students? For example scholarships, priority of living in dormitories, counseling services, etc.
	Q10 入学前の様々な手続きを一括的に行う部署がありますか？指導教員の役割は？(大学院) Is there a department which offers support of pre-enrollment procedures for international students? What are the responsibilities for international students' supervisors?
Q11 専用の宿舎はありますか。入居を希望した場合は必ず利用できますか？利用可能な期間は？ Do you have accommodations only for international students? Are there enough rooms for students who wish to stay? How long can they live there?	
■ 地域との協働 Collaboration with community	目的 「地域再生」が国の成長力の包括的戦略とされる中で〔経済財政改革の基本方針 2008（H20.6）〕、地域における大学の役割が一層重要となっている。地域社会と一体化した、地域に愛される大学となるためには、どのような取組みが考えられるか、具体的な事例を提示願ひながら、地域との関わり方を確認する。
	教育体制 Q1 他大学等と共同で取り組んでいる教育プログラムはありますか？講義の方法、サポート体制は？ Do you have collaborated educational programs which you and other universities work with? How are the lectures like? How do you manage those lectures?
	Q2 地元企業や自治体の専門家による講義・実習は行われていますか？分野、内容は？ Do you have training lectures which are taught by the specialists of domestic companies and communities? What are the fields and the contents?
	知の提供 Q3 地域住民への教育サービスとしてどのような事業がありますか？ Do you offer any educational services for the community?
	Q4 地域産業の活性化のため、経営や法律相談等、共同研究以外の取組みはありますか？ Are there any educational services to encourage domestic industries such as management and legal advise?
	交流活動 Q5 教職員・学生と地域住民が集う、または協働する催しはありますか？ Is there any activities which university staff and students collaborate with the community?
Q6 地域のために行う、全学的なボランティア活動はありますか？ Do you have any volunteering activities for community initiated by your university?	
■ 大学運営とマネジメント University management	目的 第二期中期目標・計画では、法人全体として重点をおき、計画的に実行可能な内容とするよう要求されている。大学の将来構想の立案、大学評価の改善サイクルに加え、業務を支える職員について、勤務評価がどのように取り組まれているか、快適な職場環境のための方策等を探る。
	組織運営 Q1 大学の将来計画はどのようなプロセスで決定されるのですか？ What is the process to decide the future plans of your university? (From management and financial aspects)
	Q2 事業計画の達成度や内容の検証、改善のサイクルが機能するようなシステムはありますか？(大学の業務や計画の内容をチェックし、その結果を次の年に活かしますか？チェックするセクションは？) Where is a section to evaluate it? How do you evaluate the accomplishments of original scheme?
	Q3 学生の大学業務への参画、同窓生組織の関わりは？大学運営への貢献は？ How do students and alumni take part in the management of university?
	Q4 州からの予算以外に運営・研究資金を得るための戦略的な取組みは？(大学の資金を集める方法) How do you get the funds strategically except for funds from government?
	人材・職場 Q5 勤務評価をどのような方法で行っていますか？給与への反映は？ How do you evaluate staffs' achievements? Then, does the result reflect to the salary?
Q6 上司、同僚、部下の関係やセクションでの意思疎通の方法は？働きやすい職場環境への工夫は？ How do you communicate with your boss, co-workers and subordinates? Also, how do you make a comfortable environment in your office?	

■研修から学んだこと及び業務への活かし方**ー地域に根ざした大学づくりー**

最も印象的だったのは、大学運営が、地域との密接な相互連携に成り立っているということであった。グループ全体の基金を主に施設整備等に有効に活用している。また、企業への働きかけも一過性ではなく、大学がどのような面で役に立つのか、個々の企業、団体別に分析して臨んでいる。個人に対しても、冠講座ならぬ“冠奨学金”や“冠会館”など、名を残すステータスの要望に応じている。本学では、年々運営費交付金が減額され、経費削減にも限界がある。GP獲得に期待するも、多額の学内予算の充当が前提条件であり、使途も制限されることから、新規施策の展開は望めない。このところの不景気で企業からの寄付金の下降線をたどっているが、まず提供可能な学内シーズの発掘を全学的に行い、企業、団体等へ利用を呼びかけ、次に資金援助を募ってみてはどうか。

また、UNOが地域に期待するのは資金のみではない。サービスラーニングという教育プログラムで、社会活動を体験させ、教育効果を上げている。他にも、大学運営にかかるプランニングに際しては、原案の検討段階で、地域コミュニティを含めた学外者の意見を聞くシステムがとられ、同時に情報発信を積極的に行っていることも特徴的であった。

UNOは10年位前には、財政的にも困難な状況であったと聞く。このように、地域社会とのgive&takeが機能するためには、大学側の相当な労力を伴うが、「協働」の必要性を強く感じた。

ー構成員とともに学生が“大学を愛する”ことー

次に、学生を様々な場面で大学運営に参画させていることである。図書館や食堂等の学内施設や一部業務でのアルバイト雇用は既に本学でも行われているが、UNOでは、大学がボランティア学生を募集し、新入生の修学・生活面での世話や、行事等でのサポートをお願いしているという。

また、大学の将来プランの策定にあたり、原案の段階で、学外関係者とともに学生の代表が審議に加わっていることにも注目される。もちろん、ボランティアに対する意識等は国民性によることもあるが、積極的に学生を大学運営に参画させようという姿勢は、悪いことではない。

昨年定められた「教職員像」の第1項は「教職員は、教職員はもとより、学生との間にも、互いに信頼し学び合う相互啓発的な関係を形成する。」としている。これを実現するためにも、学生との積極的な連携を図っていくことが重要であろう。それが結果的に、学生にとっては大学への愛着心を養い、それが大学の活性化につながっていくのではないだろうか。

ー事務職員のスキルアップと適正配置ー

最初に訪問した「国際学部」のグッチェア一学部長やエレン・ターナー氏は、何十年も同じ部署で業務にあたっている。聞けば、自らやりたい仕事を見つけ、責任をもって行き、そのためのスキルアップも欠かさないという。ジェネラリストではなく、スペシャリストの養成に力点がおかれている、とも明言した。一方で、毎年3つのカテゴリーによる評価を実施。職務の適正や実績について検証を行っており、こうしたチェック機能が、長期在職を可能にしているであろう。他の部署においても、例えば学部事務には一般職員とは別に、財務分析の専門職員を1名ずつ配しているとのことである。要するに、専門的な業務にはそのための人材を育成・配置し、その適正化・チェックは人物評価により行っているのである。

本学でも、業務によっては、専門性を考慮した人員配置が行われているが、その職務をより明確に区分けして、スキルアップのためのサポートを行い、かつ適正な配置が望まれる。

なお、国際化の実現には語学力の習得は不可欠であり、特定の人には高度な英語力がつくまで語学学習の継続的なサポートを行うことが有効ではないだろうか。

■本研修の在り方について

一研修目的の明確化一

本研修は、局長裁定により、「国際化する社会に対応できる優秀な人材を育成するため、…諸外国における大学の教育・研究の支援体制、事務組織等について研修させる」ことが目的とされている。

「単なる論功行賞としないこと」、と通知されているとおり、物見遊山的な性格でないことは言うまでもないが、事前に語学を勉強し、語学研修の意味も兼ねるのか、研修内容は担当する職務を中心としなければならないのか、又はテーマ性をもたせて良いのか、判断に迷った。お叱りをうけるかもしれないが、「外国の大学の雰囲気を感じてくれるだけでもいい」「元々仕組みが違うのだから、あまり深く聞いても意味がない」といった、後ろ向きの思いが頭をよぎったことも事実である。（この思いは全くの思い違いで、数多くの“収穫”があったことを明言したい。）

したがって、目的性を明確にするため、『通訳を介してミーティング等を行い、何を知り、今後の業務にどう生かしていけるのか提案する』といった明快な定義があってもよいと思われた。

一語学力と通訳について一

研修候補者推薦の依頼文書には、その要件として「基本的な語学力を有していること」とされている。元々、語学研修ではないので、高度な語学力は期待されていないものの、日常会話ぐらいはできないといけないのではないかと、との不安もあった。

今回もこれまでと同様、通訳を介しての研修となり、UNOの日本語の先生にその役を担っていただいた。大学の先生ということで、大学運営に対する理解があり、助かったが、それでもニュアンスがうまく伝わらないことも多く、難しさを痛感した。ましてや、大学とは無縁の通訳の方に依頼した場合は、さらに意図が伝わりにくくなるのではないだろうか。自らの語学力をもって、質疑応答ができれば良いが、相当のレベルが要求される。

いずれにしても、外国に行く以上、挨拶で、食事で、空港で…と通訳がフォローできない場面も多く、初歩的な会話力が無いと相手方に対しても申し訳ないと感じた。（当然、英語圏でない国の場合は、研修時間以外のサポート体制も配慮する必要がある。）今後は、語学力を有した職員や、語学研修を受けた職員を優先的に派遣し、その実践の場としても活用されればと思う。

一事前のオリエンテーションの実施一

今回の研修にあたり、国際交流チームの皆さんにはずいぶんお世話になったが、中でも、数回にわたる事前のオリエンテーションは役に立った。藤井課長や小林さんが、自らの海外研修の体験談や、そこで得たノウハウを教えていただいたほか、研修に対する心構えや、質問内容などの検討にも助言をいただいた。研修者自ら勉強会を設けることも考えられるが、今後も事前研修として、国際交流センターに主導していただいた方が、よりよい研修の成果が得られると感じた。

■研修の機会を得て…

本報告書をまとめながら、充実した数日間が思い出され、あらためて本研修の機会を与えてくださったことに感謝いたします。

参加者各々が、今回学んだ事を自らの職務に、また日々の生活に活かしていきたいと思えます。

また、綿密なスケジュールを設定し、寒い中、自ら車を運転して案内して下さった、UNOのスタッフの皆さんはじめ、国際交流センター長の露無先生、国際交流チームの皆さんにも先方との連絡調整などで大変ご尽力いただきました。

関係の皆様方に心からお礼申し上げて、本年度の職員海外研修の報告を結びます。

■研修者個人ごとの感想です。

【西山卓男】

「UNO 創立 100 周年、おめでとうございます」のひと言から始めたミーティング。居並ぶ幹部職員を前にひどく緊張し、英語での自己紹介をするも、用意していたメッセージは頭から消え、所属と名前を名乗るだけで精一杯でした。



続いて、日本の国立大学がおかれている状況や、本研修の趣旨について説明。質問に際しては、その趣旨や背景がわかるように心がけました。興味深い話をたくさん伺うことができましたが、皆で検討し、予め送付していた照会事項については、話の流れや、時間的な制約もあり、十分確認できませんでした。また、通訳を介しての会話の難しさも知りました。

チームリーダーとして、至らない点も多かったと反省していますが、何とか無事に研修を終えることができました。国際交流チームの皆さんはもちろん、特に UNO の方々には献身的なサポートをいただき、ただただ頭が下がる思いです。

加えて、私の英語力は 3 人の中で一番弱い、というかほとんどありませんので、様々な場面で、今野さん、中尾さんに助けられました。良いメンバーに恵まれたことにも感謝しています。

【今野美砂】

広大な景色や大学、スタッフ。この 3 日間、すべてが映画で見たようなとても不思議な感を覚えていました。



そして本番のミーティング。国際関係のスタッフを紹介され、最初にグッティアー学部長から挨拶を頂く。最初は緊張でことばを半分以上理解することが出来ませんでした。

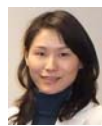
しかし、次第に各ミーティングでこの大学での運営・取り組みに興味がわき、愛国心・愛校心を誰もがもっていることを学びました。一緒に同行していただいた西山さん、中尾さんにもそれぞれ違うセクションですが、知らなかったこともあり、多くを学ばせて頂きました。

また、今回 UNO のスタッフがとても親切で、最初から最後まで、ホテルまで車での往復など親身にお世話していただき、2 日目はグッティアー学部長宅に招かれ、ホームメイドの食事を頂いたこと。その後、歌劇のクリスマスキャロルを見に行ったことなど、良いアメリカを見せていただき、この研修期間はとても有意義だったと思います。

本当に良い経験をさせていただきました。ありがとうございました。

【中尾文子】

卒業式で、総長の合図のもと、卒業生が起立をし、家族、地域の人々など、大学を卒業するにあたり、自分を支えてくれた周りの方々に感謝の意を拍手で表す場面がありました。大学を卒業するという事に誇りを持ち、周囲の人々に感謝をする。そして自らが社会人になったときに、大学や地域に貢献しようと思う気持ち。これが大学と地域を支えているのではないかと強く感じました。



今回の研修に参加させていただき、UNO からだけでなく、西山さん、今野さんから自分の知らなかった視点や考え方など、とても多くのことを教えていただきました。そして、事前のミーティングをしてくださった国際交流チームの皆さん、卒業式と学期末間際の忙しい時に、私たちのために細かくスケジュールを組み、朝早くから夜遅くまで付ききりでお世話してくださった UNO の皆さんの心のこもった対応に感謝の気持ちでいっぱいです。この研修に参加できたことは、私にとってとても貴重な経験になりました。本当にありがとうございました。